

## 博士学位論文要約

論文題目： 年少児が他者からの誤った情報に従い続ける傾向に関する研究  
—他者に与える印象を考慮することの影響—

氏 名： 残華 雅子

### 要 約：

本論文では、他者から繰り返し誤った情報を教えられる場面で年少児が過剰に誤った情報に従う要因について、情報が誤っていると考えていても、他者に与える印象を考慮することで情報に従う可能性について検討した。第1章では、信頼性の低い情報に幼児が従う傾向を扱った従来の研究についてレビューを行った。そして他者が繰り返し誤った情報を述べていることで、その情報の信頼性が低いと判断される場面では、幼児が特に情報に従い続けることを示した。例えば Jaswal, Croft, Setia, & Cole (2010) では色の異なる2つのカップを提示し、一方のカップにだけシールを隠した。そして実験者は、実際にはシールが入っていないカップにシールが入っているという誤った情報を述べた。例えば、赤色と青色のカップを提示しながら、実際には青色のカップにシールが入った状態で、「シールは赤色のカップの中だ」と主張した。そして参加児が赤色のカップを開けるとシールが入っておらず不正解になるというように、試行ごとに情報が誤りであったことを明らかにしながら、繰り返し8試行を行った。実験の結果、最終試行までの各試行で8割以上か8割程度の参加児が誤った情報に従っていた。

誤った情報が繰り返し教えられる場面で、なぜ幼児がその情報に従い続けるのかについて、これまでも検討されている。そして、従う要因について実験的検討を行った全ての研究は幼児が認知的に未熟であるために、情報が誤っていることに気づけず、正しいと信じて従っていることを前提として検討を行ってきた。しかし、幼児が教えられた情報に従っていても、情報が正しいと信じていたとは限らない。そして幼児が教えられた情報を誤っていると考えていても、社会的目標を優先することで情報に従っている可能性がある (Jaswal & Kondrad, 2016)。人に教えられた情報に従わないと、その情報が誤っていたとしても、他者に逆らったような印象を与えかねない。そのため、教えられた情報が誤っていると気づいていても、他者にいい印象を与えることや、悪い印象を回避することのために、その情報に従うことが考えられる。この仮説は Jaswal & Kondrad (2016) が理論的に指摘したが、実際の検討は行われていない。そのため、本論文では他者から繰り返し誤った情報が教えられる場面で、幼児がその情報は誤りだと気づいていても、他者に与える印象を考慮することで情報に従うか検討を行った。

第2章の研究1では情報提供者である実験者に与える印象を考慮し、誤った情報に従うか検討した。課題では、実験者は色の異なる2つの箱の一方にシールを隠し、実際とは逆の箱にシールが入っていると述べた後、参加児に対し、実験者に見られている場面か、見られていない場面で箱を選択することを求めた。実験の結果、女兒では実験者に見られて

いる場面で、見られていない場面よりも誤った情報に従った箱を選択した。男児では見られているかによって選択に違いがなかった。この結果から女兒は情報提供者への印象を考慮することで誤った情報に従うが、男児は情報提供者への印象を考慮しないことが示唆された。研究 2 では情報を述べていない保護者に与える印象を考慮することで、誤った情報に従うか検討を行った。実験では研究 1 と同様の課題を行い、前半 4 試行では全ての参加児に、実験者からも保護者からも見られた状態で箱の選択を求めた。後半 4 試行では、全ての参加児が実験者からは見られていない状態で、保護者からも見られていない場面か保護者からは見られている場面で箱の選択を求めた。実験の結果、男児でも女兒でも保護者から見られている場面で見られていない場面よりも情報に従っていた。この結果から男児・女兒ともに保護者への印象を考慮することで、誤った情報に従うことが示唆された。

第 3 章における研究 3 では実験者に与える印象が重要な場面では、他者に与える印象をより考慮し、誤った情報に従いやすくなるか検討した。実験では研究 1・2 と同様の課題の前に、与える印象が重要な条件として、実験者がいい子だと思ったら後でガチャガチャをさせてあげると教示するか、他者に与える印象が重要ではない条件として、後でガチャガチャをさせてあげることだけを教示した。実験の結果、印象が重要ではない群の方が重要な群よりも誤った情報に従う傾向がみられた。これは仮説とは一致しない結果であったため、要因は不明瞭だが、いい子だけがガチャガチャが出来ると教示されたことで情報に従わなくなった可能性と、ガチャガチャが出来るとだけ教示されたことで、情報に従うようになった可能性が考えられた。実験の結果、統制群の方がいい子群よりも誤った情報に従う傾向がみられた。これは仮説とは逆の結果であった。そのため結果の要因は不明瞭だが、2 つの可能性が考えられた。1 つ目はいい子群が上手にシールを獲得できるほどいい子とみなされると解釈したことで、統制群よりも誤った情報に従わなくなった可能性が考えられた。2 つ目に条件付きでガチャガチャが出来ると教示されたいい子群よりも、無条件にガチャガチャが出来ると教示された統制群が、実験者のことをいい人だと好意的に捉えたことで、誤った情報に従いやすくなった可能性が考えられた。

第 4 章では研究 1 から 3 について総合考察を行った。まず、研究 1 と 2 の結果から、他者に選択を知られる場面で知られない場面よりも、誤った情報に従う傾向がみられた。そのため幼児は情報が誤っていると気づいていても、他者に選択を知られることで、その情報に従っていることが示唆された。研究 3 では、他者に与える印象が重要ではない群の方が重要な群よりも誤った情報に従う傾向があり、仮説とは一致しない結果であった。そのため、幼児が他者の印象を考慮して誤った情報に従っているという仮説は研究 3 では支持されなかった。また、研究 2 の誰からも選択を知られない場面では、教えられた情報と一致した選択がチャンスレベル程度であった。この結果からは繰り返し誤った情報を教えられたことで、情報が手がかりにならないと判断し、無視した選択をするようになった可能性が示唆された。

繰り返し誤った情報を教えられる場面で、幼児が情報に従い続ける要因について実験を行い検討した全ての先行研究は、幼児が認知的に未熟であるために、情報が誤っていることに気づけず、正しいと信じていることを前提としてきた。しかし、本研究の結果からはこの前提が不正確であり、繰り返し誤った情報を教えられる場面で、年少児がその情報が

誤っていると気づいていることが示された。そして、誤りであると気づいていても、他者に与える印象を考慮することで、情報に従うことが示唆された。

- Jaswal, V. K., Croft, A. C., Setia, A. R., & Cole, C. A. (2010). Young children have a specific, highly robust bias to trust testimony. *Psychological Science*, 21, 1541-1547.
- Jaswal, V. K., & Kondrad, R. L. (2016). Why children are not always epistemically vigilant: Cognitive limits and social considerations. *Child Development Perspectives*, 10, 240-244.